

思い起こせば、AAFC との出会いは1995年に我孫子市民会館の視聴覚室で発足した当時に遡る。市の広報で会の活動を知り、故井上会長に電話をして2～3回ほど出席しただろうか。ちょうどオーディオに興味が出てきた頃で内容的にはとても関心が有ったが、当時は土曜が例会で、仕事も忙しい時期だったので、とても続けられず、それで終わってしまった。その後は毎年の秋のアピスタでのミニコンサートにはよく出席して多彩な発表内容に感心していた。今年、還暦を迎え、仕事も一区切り出来たので、3月より AAFC に改めて入会させて頂き、例会を楽しませて頂いている。近所の地域センターの広いホールで、タノイの38センチユニットの大音響で様々なジャンルの音楽を楽しむ事が出来るのはとても充実した時間になった。そんな折、「つれづれの記」の執筆依頼が有った。だが、もっぱら「癒し」と「暇つぶし」?の為、音楽を聞き流しているに過ぎ無い自分に、素晴らしいオーディオ機器を所有し、長いオーディオ歴を誇り、研究熱心な音楽愛好家である AAFC 会員の皆さんにお伝えするような内容が有る訳も無く、お断りしたいのが本音だったが、例会での発表と会報への投稿は会員の義務でも有ると思い直し、個人的な体験を書き散らした拙い文章で恐縮だが、お許しを頂ければと思う。



「音の記憶」

音は、発生したときにはすでに一瞬にして消えて無くなっている。しかも音は空気中を秒速約340m かけて伝わるものなので、厳密に言えば我々は常に過去に発生し瞬時に消えていった音を聞いていることになる。人間は常にそんな音を、頭の中でさまざまなフィルターを通してイコライジングし、再構築して思い出して感じているに過ぎない。そして音の記憶は、それを聴いたときの自分に起こったさまざまな出来事の思い出と結びついている事が常である。

著名な文芸評論家で作家、編集者でもあった小林秀雄の「モーツァルト」というエッセイの中に彼が若い頃、大阪の道頓堀をうろついていた時、ト短調シンフォニー（交響曲40番）のテーマが頭の中で突然鳴り響き、感動でその場で体が震えたとの逸話が紹介されているが、これなど何かの拍子に昔聴いた音楽の記憶が鮮明に蘇ったということだろう。彼はきっと、その後この40番を聴くたびに、道頓堀での出来事を思い出したに違いない。

「感動した初めての音楽体験」

北海道の釧路市で過ごした中学生の頃の事だった。物音一つしない寝静まった深夜の自室で

勉強をしていた寒い冬の時期の事だったと思う。

その頃は父親に買って貰った、ソニーの小型の FM ラジオを聞きながら、勉強する事が常だった。何気にスイッチを入れると、どこの深夜放送の番組かは忘れたが、不思議な音楽が流れてきた。延々と不快なエレキサウンドが続きその後一瞬の静寂があったかと思うと突然、トランペットの清涼なソロが始まった。闇を切り裂くような鋭い咆哮とすぐその後心に染み入るような哀愁溢れるトランペットの音色に衝撃を受けた。後で調べて分かったがそれは、マイルス・デイビスが1970年に発表した2枚組のアルバム、『ビッチェズ・ブリュー』(Bitches Brew)のワンフレーズだった。まだ、思春期に入りたての田舎の少年には、「孤独と哀愁を帯びた、都会の夜の大人の音楽—JAZZ」との初めての出会いだった。

その後、今日まで様々なジャンルの素晴らしい生演奏のコンサートへも行き、レコード、CDやハイレゾのネット配信などの高音質の音源を、真空管アンプやタンノイ、JBLの大型スピーカーであれこれ工夫を凝らし再生もしてきたが、未だにあの時の粗末な小型ラジオから小音量で流れて来たマイルスを聴いた時の衝撃と感動を超える音楽体験をした事は無い。

「JAZZ喫茶」

御茶ノ水の大学に通っていた学生時代(1970年代後半)、全盛期に比べ衰退していたとはいえ、都内にはまだ多くの JAZZ 喫茶が在り、JAZZ 好きの若者たちの憩いの場になっていた。覚えているだけでも、明大前「マイルス」、下北沢「マサコ」、新宿「PIT INN」「ポニー」「DIG、DUG」「木馬」、渋谷「メアリー・ジェーン」「ジニアス」「音楽館」、御茶ノ水「コンボ」「響」「ニューポート」「スマイル」、高円寺「さんじえるまん」、吉祥寺「Meg」「ファンキー」「A & F」「ファミリー」「アウトバック」、四谷「いーぐる」、高田馬場「マイルストーン」「イントロ」、水道橋「スウィング」等沢山の店がそれぞれのマスターの人柄や高級オーディオ装置やレコード枚数等で店の個性を競っていた。

レコードはまだ貧乏学生には高く、ろくなオーディオ装置も買えなかったので、当時の JAZZ 喫茶は、歴史的な名盤や最先端の輸入盤を聴く事の出来る、貴重な場所だった。

今思い出すと冗談のようだが、当時の JAZZ 喫茶は客が皆、正面に設置されている大型スピーカー(たいていはJBLかアルテックだった)に向かって黙って座り(テーブルは小さかった)、リズムもメロディーもめっちゃくちゃなフリージャズのレコードを大音響でかけている時でさえ、私語厳禁だった。(話し声や少しでも物音を立てると、店員が飛んできて「静かにして下さい」と注意された)。いわば JAZZ を学ぶ「学校」か「道場」のような場所で、当時のことから、当然タバコの煙は充満し、薄暗い店内には一癖も二癖もありそうな長髪の「ヒッピー」達が難しい顔をして、リズムに合わせて頭を振りながら、コーヒー1杯で何時間も粘っていた。

その頃の私は大学に入ってすぐ父親と喧嘩して家を飛び出し、高円寺駅前の家賃1万6千円の四畳半のぼろアパートで一人暮らしを始めたばかりで、一日も早くアルバイトをする必要に迫られていた。大学の近くで、客としてよく通っていた御茶ノ水の JAZZ 喫茶「響」でカウンターバイト

募集の張り紙を見たときは、すぐに店長の大木さんをお願いして働き出した。

大木さんは優しく腰の低い、面倒見の良い人だった。何より、若い JAZZ 好きの学生のよき理解者で、とても居心地の良いお店だった。

父親と喧嘩して家を出てきたのだから当然仕送りも無く、夜中に近くの八百屋に捨ててあった、虫食ったキャベツの葉っぱを拾ってきて飢えを凌いでいた位貧乏だったが、JAZZ の LP レコードだけは、少しずつ買い溜めていた(当時は新譜が2500~3000円、復刻盤でも1500円位していたと思う)。そんな音楽好きの苦学生には一日、好きな JAZZ を聴きながら、仕事出来るのはご機嫌なバイトだった。1年程で辞めた後も、JAZZ 好きな級友たちが次々、アルバイトを引き継ぎ、クラスの悪友達の溜まり場になっていた。

大学を卒業し社会人になった後でも何度か「響」で集まったことがあったが、皆仕事が忙しくなり、自然と足が遠のいた。その後、大木さんは「響」をたたんで、神奈川へ移ったということは聞いていたが、どうなったかは分からなかった。

もう10年程前の話だが、ヒョンな事で大木さんが藤沢市で「響庵」という JAZZ 喫茶を 1998 年より開いているのを知り、居ても立ってもいられない気持ちになり、ネットで調べてお店に電話してみた。大木さんは私の事を覚えていてくれて、電話の声は昔のままなので驚いてしまった。学生の頃の自分に会える様なそんな気持ちがして、行きの電車の中では、うきうきしながら、学生時代の思い出に浸っていた。

「響庵」は藤沢市鵜沼海岸近くの閑静な住宅街にあり、自宅の民家を改造したもので大きな看板もなく、前を通り過ぎてても分からないで何度かその周りを回り、やっと探し当てた。お店に入ると、大きな丸机が一つとカウンター、ピアノが一台。スピーカーは「JBL ランサーL101」(昔、響で使っていたものだった)が慎ましく、鳴っていた。定員7人のおそらく、日本一小さなジャズ喫茶だろう。(地元の JAZZ 愛好家のサロンになっているようだった)「響」の店内の壁にあった、コルトレーン、エルビン・ジョーンズなど、60年代後半に来日し公演の後で立ち寄っていたミュージシャン達が、壁に直接油性のマジックで書いた貴重なサインも壁ごと切り取って持ってきていた。

訪問した当時の大木さんは75歳になっていたが、とにかく元気だった。昔の仲間の消息話に花が咲き、好きなビル・エバンス、ウェイン・ショーター、キース・ジャレットやブルーノート系のLPを聴きながら楽しい時間を過ごした。

常連客に教えてもらいながら、お店のHPを作っているとの事で、その内、昔雑誌に掲載していたジャズ評論をまとめ、一つの作品にしたいと熱く夢を語ってくれた。あの時元気な大木さんと再会し、将来自分がもっと歳を取っても、こんな風に元気に自分の好きなことをして過ごしてられるように頑張ろうという気持ちになったのを覚えている。(「響庵」は2010年に閉店しました)

今は個人が比較的廉価にスマホでイヤホンからどんな場所にも、ハイレゾの高音質の音を楽しめる時代で、生演奏のコンサート以外には皆で一つの場所に集って、音楽を聴く機会もめっ

たに無い。だが様々な人々が同じ場所で同じ音楽を聴く行為は又、一つの音楽体験の記憶として私達の楽しい思い出になっていくはずである。AAFC での活動の意義も案外そんな所にも有るのではないかと思う。

2017年 11月 29日 記



JAZZ との出会い 思い出の1枚
マイルス・デイビス/ Bitches Brew



京都にて

